

る。 投助詞の「 が続くときは切らないで一句の空間の広がりを詠うのが俳句の基本、 機能を果し う句について「 という投書を朝 朝日俳 うていない。「や」で切れて、「一輪」は「一輪車」となる。意味で、」が語調を調える、あるいは「臘梅」に焦点をかたちづくる (二月七日) 一輪に呼びとめられた」という浮ついた擬人法。 日新聞社に頂 稲畑汀子選につい いた。 〈臘梅や一 · て 基 輪に呼び止められて〉 本 的 な疑問を指摘 従って間 する」

生み出 ながら、 前の語で統辞軸 か考えていない。 一時はともかく おそらく投 こた表現上の大発明なのである。 しかも「や」以下に上の意味を潜在的に伝達するという、 切字し 一の流れを 玉 [語の先生であろう。 「や」を間投助詞の「や」 0 この場合「や」は俳句の「切字」である。 一旦切断し 一旦切断し、そのことで連想軸の働きを刺戟し「や」として確立した時点から、「や」はその でその発 俳諧が

とんでもないことを言うのである。尚「一輪に呼び止められて」が浮つい 法だと思う。 た擬人法というのは投稿子の感じ方であって、 の一句について、 切字」のこの重要な働きを理解しない 古池で切れているから、 、人は、^ 蛙は隅田川に飛び込んだなどと 私は適切な表現であり擬人 〈古池や蛙飛び込む水の音〉

### 句 $\Box$ 記

### 汀 子

帰古卯講

表更期更

人も行 五月二 ŧ 日 も 来 不 め 順 に よ耐 のき か行出 とくす

五月十三日

 $\Omega$ 

怪

我

ほは

ぼ突

治 然

往軽明鯖咲

追立風惜余 悼 て の 春 花 やー 予後師出 定命 加戻 春 思春 ひ惜鯉 切む幟りに

シ惜皆 五月二 ンのに 日 デ想ひ ロイヤル 軽 重 惜 暖な春 の りの 街ゆ情

路 五. 月 の旨 で花虚 迷忘子句買 路れる届 のひ トトギス俳句大会 しる さか 同 の頃 とぬ 行に訪花 き桐ふみ 逃 <sub>れ</sub>くと 止 日 まのかか 来無し て情て

面 邂ば 追 逅 伊 ふ 桐予 ば のの か り 花 夏

旅歳や鯉牡

咲消にえ華

ての

久 陽

牡

丹

のし

あきと

百人九

白と

と牲ひみこ

を丹来皺ろ

う 幟 丹

夏をぐ

気た璃

のるの

たー

り玻

る 古 茶 0) 暮 l を 変  $\sim$ ざ ŋ L

> 待 路茶浪演 情 衣 <sup>も</sup> 急 <sub>り</sub> し 目 τ <sup>τ</sup> <sup>λ</sup> ぎ見て · 変 来 らた終 な 配 悔余心 ぬる 7 と 花 7 活 路 を で な るぁと あ ŋ しり にこ りの 桐し大風 けとこふ のこ橋五 りにとる 花とに月

五月十 復暖日火き のは燃  $\sim$ え し 清 交 社 社 衣 晴 六 よ 百 ろ 本 丹 に 粁 こ 海 月 びにの日 と 7 旅ふへ ま 樹二旅だら 晴日衣てず

葉存麦着山

五月十二 樹 四日 晴 霜 の 「冬野」 旅 東京発 ち は 7 ま 祝 た 0 た 地 < 間  $\sim$ 

お 新

り 花 〜 こ 東 透 マ 書 ー <del>エ月+八日</del> け ー と の 五月十八日 り に は 色 エ 山 ... 士 花 自 深在をの を < 消 な 息 語 手 る日 l ら足旅 桐 初の 若ば若夏 花 鰹 楓 や 楓 霞

短

5

ħ

l

日

Þ

あ

b

7

はて や牡 . 遠 に

幟る

雨マど青二 干しを二部にか 庭 て て 会 頃 と の雨下 緑音さ の一にない 庭番包りと し 雨 に近まし朴 出きるかの 鯉 至

ず窓るな花

五月つマ月桜在飯々荘月音ロの芝階 三十二日った のをの とは 影ひ麦 クラブ合同 とか かりの時雨句会 . その め少つ 稿 ´ ま 同 貞 たなこ ひ . ほ 債 芦 るきっろ 仕 屋 7 上住 よこ と ば りと ば 通 げみ り 葉 気 稿 よ 業古 け桜づ時時 平り りにく鳥鳥 忌ぬ

の 花 句会と講

の夏 みずると活 順 編壇 集上 集 会に 迎 議へ 花た 茨る

こ初

こ業

く菱牡雨牡 づえ丹上丹月夜月 ほ にり れる 雨初る と き と き の は 夏 艶の 雨 0) 0) と 狼 牡 日 も 籍 差 忽 丹 見見 5 بح のな ゆ な る <sub>戻 り</sub> りれ ゆ紅ばりし け牡か来か り丹りしな

五月三十日 お た 折 矍ち明 る 涼 よ晴ろ

俳句大会

### 念 個

### 廣 太

### 郎

Ξ H シ 傘 ユ ラ す を ン ナ 星 に る と B 鐘 ŋ 切

7

歩 余 江 麗 夜 花に き は 7 星 会る と を ŧ と 伊 集 歩 てふ 語 予 め き る 父 7 明 天 袓 ŧ る 直 守 0) 城 き 地 0) 薄 0) 木 灯 暑 涼 か 夏 か

な な

霞

L

五月三日 虚子記念文学館投句 コ

ガレ を

> $\vdash$ 根

ば

阪

首 旧

位

に

つ な

流 流

屋 ッ

ょ

ŋ

低

家

か

一十二年五月

野分会芦屋例会

未

来

向 き 神

+

度

富

士:

向

車 咲

窓 け

に

飛

ベ

る

吹

流 立

+ 年 7 館 0) 未 来 卯 浪 寄

す

五月十三日

土筆会

五月六日

あ 翻 人 子 る 遠 0) 先 心 は 飾 に 卯 弾 冑 浪 < 0) 金 日 寄 魚 せ かの る 色 な  $\exists$ <

茂 汗 り 引 風 と てよ 口 り 目 下 節 町 取 句 つ 0) 景 風 館 に 入 薫 活 気 る

五月七日 Ξ カトリック新聞選者哈 サ 悼 み 春 惜

五月八、 海 0) 上 四国ホトトギス同 に 富 士 あ り 飛 機 2 0) け あ n n

> 五月十日 朝日カルチャー若草句会

新 薬 薬 新 樹 0) ょ  $\exists$ ŋ 吉 酒 升 控 野 さ 句  $\sim$ 0) h ろ 興 0) 空 と ŋ 現 言 を れ は さ 傾 玉 れ う 7 0) な Ł 城 7 城

繭 卯 夏 出 め 会 輪 数 浪 0) ح 多 7 余 は 芥 す 名 俳 花 0) 袁 句 に イ 何 生 視 と 1 h 界 ħ ŧ < 0) L 咲 ス 流 開 玉 れ け 0) 7  $\sim$ ゆ ゆ 0) 余 < < 花

風 薫 郊 薫 五月十八日 風 外 薫 風 0) と る 繋 草木瓜会 V ふ ま で を 風 ħ ゆ 広 薫 西 き 質 7 げ る 0) る 賀 7 鉄 翁 会 路 か か 続 か な な < 畑 な

> そ 白軒海 飛 芋先づ 1 魚 0) 楚 スデー 0) 中 Þ 蒲 宇 に と 目 プレゼント 黄 何 飛 目 六 は か び 込 指 が 爛 L 動 Þ h 目 7 力 き と でくる事 ゐ ラーイエ 海 海 る 芋 芋 咲 咲 う 務 < 家 所 <

五月二十二日 ホトトギス社句会

花 招 茨 か ざ 棘 る 持 客 つ 人 に 羽 ば 音 ŧ か ŋ 夏 惚 座 敷 れ

五月二十三日

野分会東京例会

マ 子等 五月二十五日 ガレッ 0) 声  $\forall$  $\vdash$ 若水句会 1 群 ガ ħ たが レ ッ る 卜 虫 0) 群 丈 ħ たが 揺 5 る す

ビ 海 鈍 糸 新 ル 亀 樹 色 取 風 0) と シ 戦 0) テ V 糸 禍 ふ 0) 取 新 如 を 樹 鍋 れ < 0) 7 に に 語 香 る 消 あ あ る る え ŋ る に B ゆ 太 う け け ŋ V 柱 な n

五月二十六日 日 黒 学 園 句 会

袋 鍬 初 掛 味 さ が 東 に は れ 下 笥 如 笥 7 り Щ 何 Щ 稲 と を 城 言 0) 知 は ħ 尽 0) 7 色す に る

ح 句 五月三十日 れ 碑 0) ょ 文 り 字 能登ホトトギス探勝会七百号記念大会 0) 眀 句 か さ 碑 れ 0) てゆ 未 来 く薄 風 暑 薫 か な る

## 選

大昃清 葉 琵 り 5 の 内 琶 に な ほ 眼 7> 1) 5 ふ は り 盃 見 ぬる え た ょ ゐ 歌 か 7 日 か る 満 te つ丹 星 たつの 奈

良

同同

青陽

夫 平 夫 リ咳草み湯炊冬隠建峰風泰鴉沈万 豆出木れ替寺 木 吉 花 然 翔 野 腐 L 0) 住 を のの芽 る む 何 白人ほ 気 処 無 庵 日 富 は も か 音の を 燃 士の に Ł な 5 変 揺 集 0) 凍 沈 れ め き と 幻 り め た 7 望 老 な れ 富 る を B き 霜 る 士  $\langle$ 庭 夜 丹 る 力 隙 隙 隙 不湖け 淑か焚か波 焚 と 間 間 間 なな気な火な焼火し風風 風 動面 同 神 京 戸 都 同同涌同同長同同山 同同安 同同 大久保白 Ш 田 原 佳 あ 村 B 乃 葉

知虚故諷干お餅許子あ虹眠

年を

玉

中

あ

り

同

搗 れよこ

<

بح

Ш

むとき

の

神

藤

立

さ

0)

酔 は

S

は

ま 居 ぞ 出

だ松

0)

音内曆

百 同 Ш 百 同

ŧ

初

5 規

た

ま

0) 虹

年

悟

屠

蘇 S 星

気 か

西

商

分な

逢 ひ

る

子

辺

0)

夜

菜

とて

い

らぬ

色とな 0)

る

子 玉

0)

秋

お

か か

5 な

吹

 $\blacksquare$ 

晄

と

ŧ 5

り め

7 る

聖 町

樹

鼓 会

動

始

1)

日

残

ひ 戦

日

0)

雨

同

俳

文 <

字

あ

第

る

3

は

枯 の大

れ

ず

>

福

Ш

下

陶

子

と

る言

葉

に

な え

5

ぬ

葉

月

ゆ

ま

白 任

な

し富

風 での

せ

た

マ覚

てな

ほ

貘

初

花 が

O

東

京

利

初 拝 夢

か

きこと

を

<

同同

橿

原

出

長

黙

は

な

同同

り る

東

京

0

美

同

今橋

眞 理

同同

PDF= 俳誌の salon

## 雑 詠 句 評(四月号より)

比奈夫・昭 代・雅

佳 乃・くに彦・仁 義一 歩・純 也・暮 潮

しげ人・廣太郎

# 大根の葉のおいしさうなるを買ふ 熱 海 嶋田摩耶子

が分かるのは立派な主婦の目であると思う。(比奈夫)は市場など店頭に並んでいる綺麗な大根を買うときのことであろけ、それでは俳句にはならない。同じようにおいしそうに並んでいる大根のよさを判定するのに、作者は葉のしっかりしたのをでいる大根のよさを判定するのに、作者は葉のしっかりしたのをでいる大根のよさを判定するのに、作者は葉のしっかりしたのだけが、それでは俳句にはならない。同じようにおいしたが、この句大根を買うと言うの料理のことはよく知らないのだが、この句大根を買うと言うの

(昭代)

も伝わってきて面白い。(廣太郎)高い葉の方に着目した事により、本来の大根の全体像が視覚的にがある事から、葉付大根が見直されてきたと聞く。その栄養価の態ではないだろうか。それでも最近は、この葉にたっぷりと栄養

# 根と水と清々しく出合ふ 渋川 山本素竹

大

その輝きであり大根と水が出合うとは何と斬新な描写であろう。てゆく。その時の見紛うばかりの清々しさ、美しさは水あってこあろう。美しい山水に洗われ、一変して輝かしい純白の大根となっかりの泥のついた大根を傍らの小流れで洗っている情景の実感でが、「出合ふ」と言うには相応しくない。矢張り畑から抜いたばが、「出合ふ」と言うには相応しくない。矢張り畑から抜いたばが、「出合ふ」と言うには相応しくない。矢張り畑から抜いたばが、「出合ふ」と言うには相応して

題としては「大根洗ふ」であろうか。(廣太郎)こで今「水」と出合うのだ。とここまで読んでみると、やはり季えで一での大根の物語を垣間見ているようだ。種蒔きから始まって、野この大根の物語を垣間見ているようだ。種蒔きから始まって、野こちらも「大根」であるが、直接目にする表現を超えて、何か

スーパーに売っている「大根」は、殆どが葉の付いていない状



湯 に 屋 は Oま 0) 0) < 本 掻く る ح に なるま 0) 墓 風 世 B 0) L る 咳 な い 易 0 ح 眀  $\mathcal{O}$ 地 、父母 鷹 島 あ Š 目 初 5 は 尽 残 字 で り 0) 休 ょ は 熱 ね り き る と在 遍 り 人 鷹 0) 空 馥 きも 7 あ 居 7 木 ク が 舞うてをりに こころ ま あ 夜 郁 指 IJ りけ 熔 り 居 の B だ ね Þ L が 間 り ス 岩 ま 葉 泪 降 け り去 日偲ば 大 に 冬うら や と 細 ず 残 移 り 小 え 夜 年 り 力 り に あ き れ 0) 今 春 る け か た 1 け け 5 る む F, り 年 凪 月 n な り 風 ŋ 橿 千 福 東 箕 京 東 同 神 戸 原 Ш 京 面 葉 都 京 今井千 同 同 同 井 同 大木さつき 同 安 同 稲 後 同 長 上浩 畑 下 藤 Ш 出 原 廣 あ 陶 太郎 立 夫 長 子 郎 葉 8 昼冬母ど武ク水大敗楽旧明放大在小 リスマ のれ 蔵 荷し 仏 鳥 年 星 天 銀 に み を Oは 見 は 、スキャ 杏 作手の 眺 す 誰 下 水 小 黄 を 棚 輪 きに去 ろされ 春 口 S の 嵯 に 田 ル 言 は 峨 スキッ 青 の れ ふ げ 仕 話 ゐ 峨野 年 に を 嵯 空 予 る と 事 ŕ 加 り 峨 人群 結 子 水 B は て来 願 り る な 紅 仕 日 木 な れ か か 77 'n < な ぬか度短 7 す る 7 星 な 葉 たつの 神 吹 宝 東 徳 金 神 熊 戸 田 塚 京 島 沢 戸 本 後藤比奈夫 同 宮 同 水同河 同 上 同 浅井靑陽 同 藤 同 三 同 岩 田 野 﨑 浦 村 出 崹 む 美 暮 昭 純 中 う

耳星納か島海吹葛日星初初冬顔

もた

4

正

奇

潮

代

正

也

### 天地有 旬

汀 子

> く風と残る木 の 葉と細 き月 京 都 安 原

葉

吹

木枯に耐えている木の葉と繊月。

海

光に十

字の

窓や

冬うらら

千

葉

大木さつき

海光に光る窓の十字。

納屋に咳ありしが居間に移りけり

箕

面

井上浩一郎

咳の足取りを捉えた作者の位置。

余韻を曳く夜。

顔見世のはねて夜だけ残りたる

神

戸

後

藤立夫

くつろぎの楽しみ。

初雪を熱きものと捉える感動。

初雪といふ熱きもの降る夜かな

神

戸

長 山

あや

耳

休

め

目

休

め 指

が

毛

糸

編

む

東

京

今井千鶴子

ŧ ħ 易 き 老 の 泪 ゃ 秋

袷

福

山

竹下陶子

長老の証。

遂に一番星が現れた鷹の空。

星になるまで鷹舞うてをりにけり

東 京

稲畑廣太郎